

新 除 草 剤

果の変動はプロメトリンと異なり、小さいという特徴がある。

水稻に対する薬害については、発芽時～3葉期では極めて安全で、またヒエとイネとの間の選択殺草性があるので、移植前の土壌混層処理でも殆んど薬害がなく安全性が高い。

魚毒性はコイで48時間TLMが26 ppmと小さく、マウスのLD₅₀が535 mg/kg、ラッテには750 mg/kgと安全である。

使用方法：移植後5～10日に10アール当たり3～4 kgを均一に散布する。

適用土壌は、極端な漏水田を除く洪積火山灰土及び沖積の砂壤土～埴土である。また、若苗、軟弱苗使用の水田においては、深水状態(5 cm以上)での使用は避ける。一方散布後3日間位は落水はしない。

本剤はこの他移植前施用、移植後15日程度の施用、ヒルムシロ防除剤などとしても有望とされている。

K-86粒剤

呉羽化学工業株式会社

性状・作用特性：パーロックD(暖地用)とパーロックK(寒地用)の2種類がある。その成分はパーロックDがペンタクロロフェノールナトリウム(PCP)17%と、2-メチル-4-クロロフェノキシエタノール(MCPE)0.8%の混合剤で、パーロックKがPCP20%・MCPE0.6%の混合剤で、いずれも粒剤である。

両剤はPCPの欠点であるマツバイに対する

殺草力を高めるために、ホルモン型のMCPEを加えたもので、接触的作用と移行的作用をもつ除草剤である。

土壌中の移動性はPCPよりやや大きいが、比較的小さい方である。効力の持続性は、PCPより長い。

雑草種類に対する選択殺草性は、イネ科のヒエ・広葉のコナギなど1年生雑草に効力が大きいほか、多年生雑草のマツバイにも有効である。

水稻に対する薬害発現作用は、土壌中の移動性のやや大きいMCPEが入っているため、株の開張や初期生育を抑制することがあるが、後に回復し、収量にまで影響することは殆んどない。

使用方法：(イ)パーロックDは暖地の普通栽培を対象とし、移植後4～7日及び中耕後土壌処理用として使用し、(ロ)パーロックKは寒地の普通栽培の中耕後土壌処理用として使用する。散布量は、両薬剤とも10アール当たり製品3 kgを均一に散布する。

土壌中の移動性がややあるので、漏水の少ない埴土～埴土の水田で、日減水深2 cm以下のところで使用し、その他では薬害の発生のおそれがあるので使用しない。通常PAMの適用地帯が安全である。その他はPAMに準じる。